様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月３１日現在

機関番号：１７７０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００９年～２０１１年
課題番号：２１５００５９９
研究課題名（和文）　武道のグローバル化と中学校における武道教育の在り方
：柔道か JUDO か
研究課題名（英文）　The globalization of Budo and the nature of Budo education in junior high school in Japan
研究代表者
北村 尚浩（KITAMURA TAKAHIRO）
鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・准教授
研究者番号：７０２７４８６８

研究成果の概要（和文）：本研究では，教員，生徒，体育専攻学生，海外での武道参加者のそれぞれに対する調査を通して，武道の教育効果について「運動技能」「コミュニケーション」「伝統」の側面が期待されることが明らかになった．そしてこれらは性別や年齢などによって異なり，とりわけ中学生では性差，学年差があることが明らかになった．さらに，海外の参加者と比較して日本の参加者の方がスポーツの１つの種目として武道を捉えている傾向が認められた．グローバル化が進む武道を伝統文化の教育，継承を目的とする中学校で展開する上での重要な示唆が得られた．

研究成果の概要（英文）：Through the survey for teachers, students, P.E. students and martial arts participants in foreign countries, “motor skills”, “communication” and “tradition” are revealed as aspects of expected outcomes through martial arts. There were gender and age difference. Especially in junior high school students, there were gender and grade difference. Furthermore, there was a tendency that martial artists in Japan think martial arts as one of sports than foreign participants. In conclusion, it could get important suggestions for develop martial arts programs for educating tradition and culture in junior high schools.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：体育・スポーツ社会学
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学
キーワード：中学校，武道，教育効果，グローバル化，伝統文化

１．研究開始当初の背景

武道の学習を通じて我が国固有の伝統と文化に，より一層触れることができるようにする（文部科学省，2008）ため，中学校の体育における武道が必修化され，2011 年度より完全実施されることになった．武道への積極的な取り組みを通して，伝統的な礼法を理

解し，相手を尊重して練習や試合ができることが重視される．さらに，自分で自分を律する克己の心を表すものとして礼儀を守るという考え方があることを理解して取り組むことが期待されている（文部科学省，2008）．一方，オリンピック種目の一つである柔道のように，武道種目が諸外国に波及しグローバル化の流れがあることもまた，事実である．武道の国際化，国際的な普及に伴って，いわゆる武道のスポーツ化を危惧する声（日本武道学会，2008）も聞かれる．

このような武道のグローバリゼーション（Globalization）の潮流の中にあって，筆者らは，達成目標理論（Nicholls，1984）に着目し，カナダにおける武道参加者を対象として，実証的研究に取り組んできた（Kitamura et al., 2008：北村ら，2008a：北村ら，2008b）．その結果，柔道の参加者では他の種目と比べて自我志向性が強く，自我志向性には，競技会などへ出場といった参加動機が強く寄与していることが明らかにされた．達成目標として自我志向性が過度に強化されると，生涯にわたる人間形成や技能の修得といった武道の本質的な意味合が希薄になることが危惧される．

柔道のポイント制やカラー柔道着などに見られるように，武道の国際化はすなわちスポーツ化であると言える．そのような中で，文化の伝承を目的とする武道教育はどのようにあるべきだろうか．

以上のような背景のもと，中学校の体育で必修化される武道種目の在り方について，有意義な示唆が得るため，本研究に着手した．

２．研究の目的

本研究の目的は，中学校で必修化される武道について，教員，生徒，その他の武道愛好者の国際比較検討を通して，中学校における「日本の伝統文化の伝承」を目的とした武道教育の在り方を明らかにしようとするものであった．

３．研究の方法

本研究は，中学校教員，中学生，体育専攻学生，海外での武道実施者のそれぞれの対象者への質問紙調査によって収集されたデータの分析を中心として進められた．いずれも鹿屋体育大学倫理審査小委員会の承認を得て行われた．各調査の概要については下記に示すとおりである．

(1) 教員調査

中学校での武道種目の実施状況と，2012年度からの新学習指導要領への対応状況を明らかにするため，全国から 1,000 校を無作為抽出し，質問紙調査を実施した．調査内容は，武道種目の実施による期待される学習効果（22 項目），武道必修化に向けて整備が必要と思われる条件（13 項目），武道種目の実施状況（16 項目），学校の属性（5 項目），回答者の属性（6 項目），スポーツを行う際の達成目標（12 項目）であった．

(2) 中学生調査

教員調査を通して協力を要請し，46 校 5,718 人の中学生を対象として，質問紙による配票調査によってデータを収集した．調査内容は，武道種目の実施による期待される学習効果（22 項目），武道の授業に対する不安要因（11 項目），武道に対するイメージ（34 項目），武道種目の経験（2 項目），スポーツを行う際の達成目標（12 項目），個人的属性（6 項目）であった．

(3) 体育専攻学生調査

調査協力の得られた 5 つの体育・スポーツ専門学部・学科の学生を対象として，質問紙による配票調査によってデータを収集した．調査内容は，武道に対するイメージ（34 項目），期待される武道の教育効果（22 項目），武道必修化に向けての必要条件（13 項目），武道指導能力の自己評価（22 項目），運動・スポーツ実施状況（5 項目），武道の経験（1 項目），スポーツを行う際の達成目標（12 項目）個人的属性（4 項目）であった．

(4) 海外調査

ドイツ・ベルリンの柔道クラブ会員 79 名から，質問紙による配票調査によってデータを収集した．調査内容は，武道種目の実施状況（5 項目），武道種目を始めたきっかけ（15 項目），武道実施による学習効果（22 項目），武道に対するイメージ（34 項目），スポーツを行う際の達成目標（12 項目）であった．

以上 4 調査によって得られたデータに対して統計処理を施し，分析を行った．

４．研究成果

(1) 教員対象の調査から

回答が得られた 455 校について分析した結果，体育の授業で武道種目を実施していない学校が 15.2%みられた．武道の必修化に向けて整備が必要なこととして，「用具・教材を購入するための予算」「道着や防具など用具・教材を揃えること」が強く求められていることが明らかとなった．一方，地域の施設を利用することや他校との連携，地域の指導者や団体との連携については，比較的ニーズは低いことが明らかとなった．わずかではあるが，教室という回答もみられ（2.6%），安全面からも必修化に向けた対応が求められる．これを武道を実施している学校と実施していない学校とで比較したところ，設定した 13 項目のうち 8 項目で有意な差が認められた．実施していない学校では，地域の指導者や武道種目団体からの協力や他校との連携を，実施している学校よりも強く求めており，用具・教材の必要性と合わせて，人的資源への

ニーズが強いことが明らかとなった．武道場の整備や場所の確保については，有意な差は認められなかった．回答者のうち，武道種目の段位を有する者は約 6 割（59.6%）で段位を持っていない者が 40%あまりみられた．両者の間には，必修化に向けて必要とする内容にも差がみられ，とりわけ段位を有しない者は指導体制に関連する項目に必要性を強く感じている様子が明らかになった（下表）．

表．必修化のための必要条件：回答者の武道経験による比較

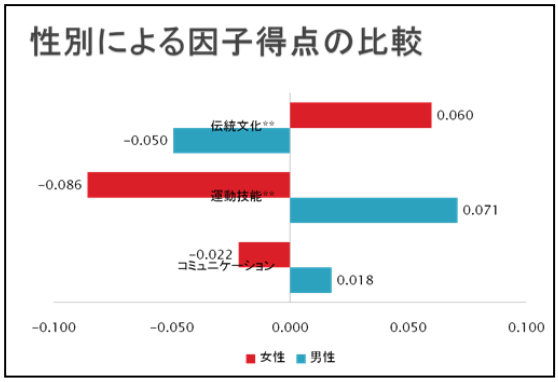
	無段者(n=183)		有段者(n=270)		t-value
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
地域の指導者から協力を得る	3.47	1.26	2.76	1.28	5.85***
地域の施設の利用	2.74	1.50	2.29	1.41	3.21***
武道種目の研修会・講習会等への教員の参加	4.23	0.90	3.85	1.15	4.00***
外部から指導者を招へいすること	3.45	1.22	2.77	1.34	5.56***
地域の武道種目団体からの協力	3.39	1.32	2.73	1.34	5.20***
他の学校との連携を図ること	3.03	1.22	2.71	1.38	2.65**
用具・教材を購入するための予算	4.74	0.73	4.56	0.90	2.32*
武道を指導できる教員の補充	3.97	1.09	3.55	1.39	3.55***

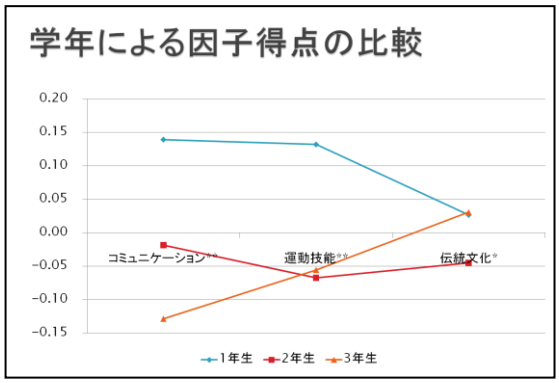
*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.005

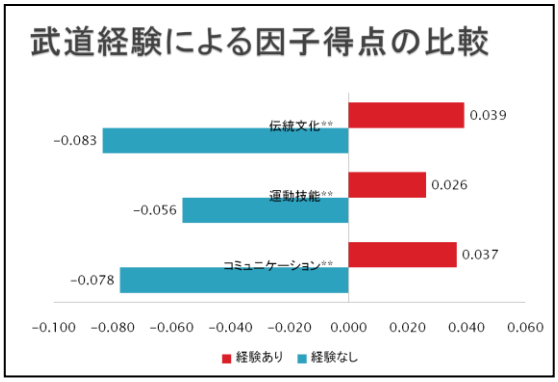
（2）中学生対象の調査から

中学生が期待する武道による教育効果は「対人関係能力」「運動技能」「伝統文化」の3つの要因に集約された．そして，性別，学年別，武道の経験などでその効果に対する期待の度合いが異なることが明らかになった（下図）．

さらに，男子よりも女子の方が技術的な不安を抱いており，試合や人と組み合うことへの抵抗が強く，同性の教員からの指導を望んでいる様子がうかがえた．

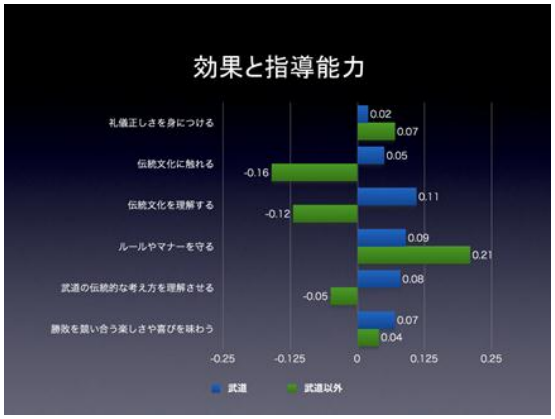






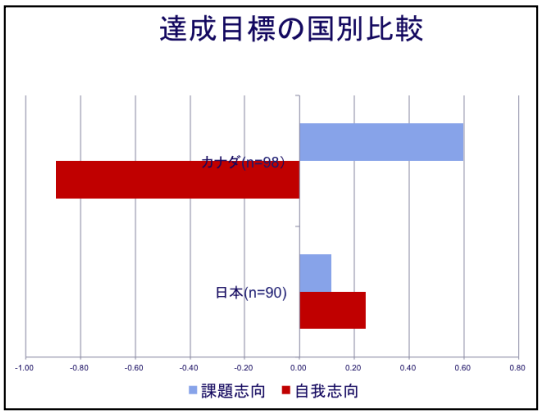
（3）体育専攻学生対象の調査から

中学校における武道必修化によって「対人関係能力」「運動技能」「伝統」の教育効果が期待されると考えていることが示され，武道種目を専門に行っている者とそうでない者との間で，期待の度合いが異なることが明らかになった．さらに，それぞれの指導力に対する自己評価でも，武道種目を専門に行っている者とそうでない者との差が明らかになった．



（4）海外での武道実施者対象の調査から

ドイツ・ベルリンの柔道クラブ会員 79 名から得たデータを分析したところ，武道による教育効果として「運動技能」「コミュニケーション」「伝統文化」「規律・マナー」が期



待されると考えていることが示された．また，日本の柔道有段者と達成目標（Goal Orientation）を比較したところ，ドイツの柔道クラブ会員は課題志向が強く，日本の有段者は自我志向が強いことが示唆された．また，カナダの武道参加者と日本の武道参加者の達成目標を比較したところ，カナダの参加者は課題志向が強く自我志向が弱いのに対して，日本の参加者は課題志向よりも地自我志向が強いことが示唆された（図）．

以上の調査データの分析を通して，グローバル化が進む武道を伝統文化の教育、継承を目的として中学校で展開する上での重要な示唆が得られた．

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①北村尚浩・川西正志・濱田初幸・安道太軌（2011）中学校における武道必修化によって期待される教育効果：教員の立場から．日本体育学会第 62 回大会体育社会学専門分科会発表論文集, 108-113．査読無

②安道太軌・濱田初幸・川西正志・北村尚浩（2011）体育専攻学生の武道指導能力に対する自己評価．日本体育学会第 62 回大会体育社会学専門分科会発表論文集，114-119．査読無

③濱田初幸・前阪茂樹・川西正志・安道太軌・北村尚浩（2011）体育専攻学生が期待する中学校における武道必修化による教育効果：武道を専門とする学生に着目して．鹿屋体育大学学術研究紀要第 43 号，1-9．査読有
http://www.lib.nifs-k.ac.jp/HPBU/annals/an43/43c.html

④北村尚浩・川西正志（2010）中学校における武道必修化に向けた課題．日本体育学会第 61 回大会体育社会学専門分科会発表論文集，84-89．査読無

〔学会発表〕（計 10 件）

① Takahiro Kitamura, Hiroki Ando, Masashi Kawanishi, Hatsuyuki Hamada, and Shigeki Maesaka（2011）What will you teach through martial arts?．8th European Association for Sociology of Sport Conference, Umea University, Sweden 2011.5.21.

②濱田初幸・前阪茂樹・安道太軌・北村尚浩（2011）中学生にとっての武道必修化とは：期待する学習効果に着目して．日本武道学会第 44 回大会．国際武道大学，2011.8.29.

③北村尚浩・川西正志・濱田初幸・安道太軌（2011）中学校における武道必修化による期待される教育効果：教員の立場から．日本体育学会第 62 回大会．鹿屋体育大学，2011.9.27.

④安道太軌・濱田初幸・川西正志・北村尚浩（2011）体育専攻学生の武道指導能力に対する自己評価.日本体育学会第62回大会．鹿屋体育大学， 2011.9.27.

⑤安道太軌・川西正志・北村尚浩（2011）体育専攻学生が抱く武道に対するイメージ．日本生涯スポーツ学会第 13 回大会．大阪産業大学，2011.10.29.

⑥北村尚浩・川西正志・安道太軌（2011）体育専攻学生の武道指導能力と期待する学習効果．日本生涯スポーツ学会第 13 回大会．大阪産業大学，2011.10.29.

⑦Takahiro Kitamura, Masashi Kawanishi, Hatsuyuki Hamada, and Shigeki Maesaka（2010）How do Japanese youth view martial arts?．7th European Association for Sociology of Sport Conference. University of Porto, Portugal 2010.5.8.

⑧Kitamura Takahiro, Kawanishi Masashi, Hamada Hatsuyuki and Maesaka Shigeki（2010）The Globalization and Essentials of Japanese Martial Arts, Budo, 17th International Sociological Association, University of Gothenburg, Sweden 2010.7.

⑨北村尚浩・川西正志・濱田初幸・前阪茂樹（2010）中学校における武道必修化に対する教員の意識：性，年齢による比較．日本生涯スポーツ学会第12回大会.仙台大学，2010.10.23.

⑩北村尚浩・川西正志・横山茜理（2009）武道実施者の達成目標．日本スポーツ社会学会．岩手大学，2010.3.29.

６．研究組織

(1)研究代表者
北村 尚浩（KITAMURA TAKAHIRO）
鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・准教授
研究者番号：70274868

(2)研究分担者
川西 正志（KAWANISHI MASASHI）
鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授
研究者番号：50177713
濱田 初幸(HAMADA HATSUYUKI)
鹿屋体育大学・スポーツ・武道実践科学系・准教授
研究者番号：50347118
前阪 茂樹(MAESAKA SHIGEKI)
鹿屋体育大学・スポーツ・武道実践科学系・准教授
研究者番号：10209364